

山崎・ヴケリッチ・洋との交流

く小中陽太郎著「上海物語」と書評を読んでく

エッセイスト 近藤 節夫

「上海物語」あるいはゾルゲ少年探偵団（未知谷刊）については著者執筆中から個人的に強い関心を抱き、出版されてから一気呵成に読んだ。だが、著者特有の柔らかい文章を読み進むうちに、多くの登場人物の人間模様と時代を超越する彼らの千変万化の素早いパフォーマンスに翻弄され、頭が混乱して思うように脳内細胞が追い付いていかなかった。登場人物が著名人であろうともリアルなイメージが思うように伴わず、ストーリーのスピード感に付いていけないもどかしさがあった。

この悩みを一刀両断鮮やかに裁いてくれたのが、「出版ニュース」（2017年2月上旬号）掲載の中川隆介氏の歯切れの良い書評である。進まぬイメージを明快に紐解いてくれ、ストーリーを高所から三次元風に描いて分析して見せてくれた。その軽業師のようなアナリストぶりは、思わずなるほどと唸らされるものだった。中川氏の幅広い空想的分析力に敬意を表するものである。

本書では、戦前の上海をメイン・ステージに多彩な人物たちが、入れ替わり立ち替わり登場しては、大人になっても子供のころの面影のまま個性的な活躍ぶりや有為転変の世界を自由に駆け巡る。その間に歴史的事件や、怪しげな事件、スキヤンダルまでやり過ぎすのだ。中でもゾルゲ事件は、登場人物がそれぞれ性格的にも行動的にもユニークで魅力的である。それに常

に追われているという強迫観念に駆られた心理状態のせいだろうか、何とも揃いも揃って男女関係が見境なく激しい。

○ヴケリッチの忘れ形見・山崎洋

リヒャルト・ゾルゲの仲間、ブランコ・ド・ヴケリッチの忘れ形見である友人、山崎・ヴケリッチ・洋は、慶應義塾大学経済学部と同級生である。大変僭越ではあるが、ゾルゲ事件の関係者、ヴケリッチの妻淑子と子息洋を個人的に知る立場から、若干説明を付け加えたい。

山崎洋が「洋」と名付けられたのは、洋の誕生以前に母淑子がすでに父ヴケリッチと話し合い、男児が誕生したら世界で広く活躍して欲しいとの願いを込めて、「東西をわけ隔てのない」大洋の「洋」と名付けることを早くから決めていた。後年現実には両親の願い通りとなった。

私たちは、1963年大学を卒業したが、日吉、三田のキャンパスでは互いに何らの接点も面識もなかった。卒業して20年近くを経た1984年、旧文部省の海外教育視察団にお供して、米ソの対立の狭間で国際的中道政治のリーダー格だったチト



山崎 洋



近藤 節夫

大学卒業アルバムより

大統領が亡くなり、国家として危ぶまれていた旧ユーゴスラビアを訪れた時、思いが

けず異国の地で、通訳と添乗員という立場で初めて出会う奇遇となった。話しあっている内に大学で同じ系統の社会政策ゼミで学んだことも分かり、一般的な社会問題、国際問題、民族問題などについて語り合い、帰国後離れていながらも文通により交流を深め、急速に親しくなり新たな友人関係を築いて行った。今では洋が日本へ帰ってくる都度会ってはお互いに友情を温めあっている。洋が在学中母上とともに湘南海岸の私の実家近くのゼミ教授の自宅を訪れたという話から、ゼミや湘南地方の風情について母上ともしばしば電話で話す機会があった。洋との交流について寄稿した掲載誌を母上にお送りしたところ大変喜んでいただき、私に対して息子の友人という以上に打ち解けて、長時間に亘り電話で話すことも度々だった。ある時私から母上にぜひ一度お目にかかって直接お話を伺いしたいとお願ひしてみた。だが、母上は遠慮がちに年齢も重ねて老け込んだので、今更陋習を晒したくないと言って丁重にお断りされてしまった。この辺りにも長い間周囲の冷たい視線に晒された苦悩が脳裏から離れず、世間から身を退こうとする気持ちがあつたのではないかと同情を憶えざるを得なかった。

だが、その一方でこんな強い気持ちをもぶつけることもあった。ある時温厚な母上が普段とは打って変わって、不意にユーゴ内戦におけるNATO軍の空爆を鋭い口調で非難されたり、欧米による戦争犯罪人としてのミロシェビッチ元大統領への一方的な非難に対しても反論されたのにはびっくりしたものである。

母淑子は裕福な家庭に育ち、津田塾時代にはアメリカへ推薦留学され、卒業後はその当時まだ珍しかったオフィス・レディとして得意の語学を生かして商社三井物産に勤務された。そんな折も折運命的な出会いが待っていた。淑子はお能を鑑賞に出かけた能楽堂で、ブランコ・ド・ヴケリッチと運命的に巡り会い、やがて2人は愛し合うようになった。だが、2人の結婚は両親、家族、親戚ら周囲から強く反対された。それでも淑子は、前途に不安を感じながらも信念の人ヴケリッチとともに生きていく道を選んだ。そして暗い戦前戦中の環境下で打ち寄せる苦難を払い除け、戦後愛する夫を失った苦しみと悲しみを乗り越え、女手ひとつで1人息子の洋を育て上げた。

終戦の年、昭和20年1月淑子は、網走刑務所からヴケリッチ急逝の知らせを受け、急ぎ幼い洋を伴って戦争末期の混乱の中を現地へ向かった。ヴケリッチの遺体は刑務所内のベッドに横たえられていたわけではなく、窮屈な座棺に押し込まれたままだった。その姿を一目見て淑子は堪らず涙がこぼれ、さぞ苦しかったでしょうと語りかけたと悔しそうに話された。淑子はヴケリッチがもう少し頑張って長く生きてくれれば、まもなく終戦となり親子3人で平和に暮らせたのにとヴケリッチと母子の薄倅の宿命を嘆き、悲しそうに話された。

戦前ソ連のスパイと言われたゾルゲは、戦後になってソ連政府から改めて戦時中の諜報活動の功績を再評価され名誉を回復した。同時にヴケリッチもゾルゲと同じようにソ連政府から戦時中の活動につき名誉を回復し、亡きヴケリッチに代わって山崎母子はソ連政府から榮譽ある式典に招待された。1965年1月、2人は揃ってクレムリンにおける授賞式に出席し、ミコヤン最高幹部会議長から「大祖国戦争第一級勲章」を授与されたのである。

戦後になって、淑子は旧ユーゴスラビア大使館（現セルビア

大使館)で大使秘書として勤務する傍ら、女手一つで洋を玉川学園小学部、世田谷学園中学・高校から慶應義塾大学へ進学させ滞りなく卒業させた。別離の時期はしばしばあったが、淑子は永遠の別れまで心から愛する人に寄り添い、洋に最高学府の教育を授け、立派な社会人として育て上げた。強い信念と責任を持って自ら行動する、一本筋の通った意志の強い女性だった。

大学を終えると洋は自分なりに考えるところがあり、母一人子一人の寂しい環境の中で健やかに育ててくれた愛情深い母が止めるのを振り切り、父の母国へひとり旅立った。ベオグラード大学で学び、修士課程を終えてから教える立場に替り、セルビア語・日本語の翻訳に勤しみ、セルビアクロアチア・日本語辞典を共著として世に出した。その後セルビアの偉大な詩人ペトロビッチ・ニゴシエの作品を日本語版で紹介した功績により、2009年には「日本翻訳家協会特別賞」を受賞した。近年セルビア語版「古事記」「奥の細道」をセルビアで出版して、日本の名作をセルビアに普く紹介して日本とセルビアの文化交流に献身的に貢献している。

2003年山崎母子は篠田正浩監督作品「スパイ・ゾルゲ」の試写会に招かれた。映画では夫と初めて出会った時のシーンが象徴的に描写されていた。母淑子がヴケリツチに見染められた時身に着けていた衣装は、当時としては珍しく洒落た洋装だったが、スクリーンで女優小雪が演じる淑子は和服を羽織っていた。その場面を一目見た洋から、衣装は事実と違うと聞かされた。その言葉を私は小中陽太郎氏に伝え、小中氏が篠田監督に直接質した結果、以下のことが分かった。映画では衣装担当の衣装デザイナー森英恵氏が舞台演出上の強い希望と拘りによ

り、実際の洋装ではなく、敢えて当時の一般的な日本人女性らしい和服姿に替えられたことが分かった。私は洋に洋装を和装に替えられた事情の理由と経緯を伝えた。

この衣装のすり替え部分については、ヴケリツチにはもっと深い動機があったことを小中氏は見事に読み解いている。ヴケリツチは、ユーゴスラビアの「ポリテイカ」に8年間「日本通信」を送り続けた。そのなかに、日本女性のモガ・モボの発生を、職業婦人の統計とともに紹介している項がある。「モダンである方が日本女性のセックスアピールはますのだ」(山崎洋編・訳「ブランコ・ヴケリツチ 日本からの手紙」未知谷刊)。冒頭私は小中氏の本書につき時代を超えて混乱すると評したが、小中氏は、ここでスパイと見做されたヴケリツチが、すぐれた日本紹介者であったことを伝えたかったのである。実は、その二重性をゾルゲも持っていた。いやそれこそゾルゲ事件の本質だったと言いたいのだと思いだった。更に言えば、この二重性こそが小中氏の特徴とは言えないだろうか。

ある時、富士霊園の両親の墓地へ洋とともにお参りした折、洋は母が生まれ育った東京ではなく、遙か離れた富士の裾野に



両親の墓前に詣でる山崎
両親の魂が眠っているのは、生前両親が日本一の富士山が見える場所に埋葬し
て欲しいと

望んでいたからだと話してくれた。墓石にはヴケリツチ家縁者が武勲によって神聖ローマ帝国の血筋を引く名門ハプスブルグ家から賜った由緒ある家紋がしっかりと刻まれている。

洋は大学卒業後、亡父の故郷旧ユーゴスラヴィアの首都ベオグラード（現セルビア首都）へ旅立ったが、そこには洋なりに父の故郷の地で亡き父の魂に触れたいとの強い想いと、毅然として生きた父に学ぼうとする人生設計が芽生えていたからである。

このように母子ともども苦難の人生を歩むことになったのは、必ずしも戦争のせいばかりではない。敢えて、火中の栗を拾いながらも自らの信念と愛を貫いた両親の生き様を自らも活写してみたかったのだろう。周囲の厳しい非難と中傷に晒され白眼視されながら、苦しい人生を歩んだ両親はすでにこの世にいない。両親の苦勞を知る洋は、いま詩人で読売文学賞受賞者の妻佳代子とイラストレーターの子息・光家族らに囲まれ、ベオグラードで幸せな生活を送っている。

洋は両親が揃って波瀾万丈の苦難に耐えた厳しい人生経験にも拘わらず、2人のアカデミックな探究心と行動力を受け継ぎ、本年日本・セルビア友好条約締結135周年を迎える両国間の橋渡し役として文化的交流に積極的に関っている。いつもこやかに母淑子のDNAである優しい一面を身体一杯に漂わせて周囲を和やかにしてくれる。

日ごろより敬愛する小中陽太郎氏が、何故ゾルゲやその仲間と友人山崎洋ら関係者にこれほどひたむきに関心を寄せるのか、はつきりとは分からなかったが、中川氏の書評によって目から鱗のように頭がすっきりした。小中氏自身ゾルゲ事件の起点と

なった中国・上海で少年期を過ごし、戦前の租界で思う存分走りまわった懐かしいノスタルジアが、著者小中氏の五臓六腑に浸み込んでいるからである。小中氏の諸々の関心の原点は上海にありと見ることができる。



右山崎 洋の父ヴケリツチは厳しい治安維持法の目をかい潜りながら、密かに情報収集活動を行う過程で、言論の自由を否定さるる非人間的世界に居住することを余儀なくされたが、あの暗黒の時代は結果的に国家の弾圧により多くの犠牲者を生んだ。

昨年わが国では秘密保護法が制定された。更に今年に入り、過去に3度廃案になったにも拘わらず、その共謀罪法を盛り込んだテロ等準備罪という言論の自由を束縛する法案が成立したことにより、国家によってまた国民が監視、弾圧される暗かった戦時中に逆戻りする予感さえ憶える。あの時代に国家、国民のためを思い一杯言論の自由と報道の自由を守ろうと闘った市井の人々や、その統制下で自由のために必死になって活動した人たちが、治安維持法によって検束された時代を思い起こすと背筋が寒くなってくる。言論の自由を否定しようとするこのテロ等準備罪法により、報道と表現の自由は危機に瀕しようとしているのである。

「上海物語」によりはしなくも戦前の治安維持法下の暗い時代の空気を深く考えさせられた。

（日本ペンクラブ理事）